

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520186

研究課題名(和文)メディアと戦争柄着物

研究課題名(英文)Media and Kimono with war images

研究代表者

乾 淑子 (INUI, YOSHIKO)

東海大学・国際文化学部・教授

研究者番号：40183008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：戦争柄の着物(着物、襦袢、帯などに軍艦、銃、国旗等の軍事的モチーフを染め、又は織り出したもの)と、それらの制作された同時代におけるメディア(新聞記事、絵はがき、雑誌挿絵、ニュース映画など)との関連を探った。大きく分類すると絵はがき、新聞紙面などをそのまま写した図柄と、ニュース映画などに基づいたことを示すことが目的かと考えられる図柄とがある。その両方ともに再現性が高く、抽象的な要素もある銃や軍艦などの図柄との両方の手法を混在させた着物図柄の規矩による意匠化である。これらの意匠は基本的には商業的な目的において製造、販売されたにすぎないが、その故に大きな社会的な影響力を有したと考えられよう。

研究成果の概要(英文)：War Image Kimonos (from Meiji period to Early Showa period) are sometimes based on the media in the same ages when they were made. News papers, pictures on post cards, illustrations in magazines were copied and died on those kimonos. The design policy of kimonos are also strictly acted on the design of war image. Motifs from media are always real, and guns and other military goods are sometimes not so real. The mixed way of designing is one of the policy of kimonos. People are able to see the real image of the issues on news paper, pictures on post cards, and illustrations in magazines about the wars(Chino-Japanese war, Russ-Japanese war, and so on) from Meiji to Showa, on the kimonos.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論 戦争 着物 メディア 近代 軍事

## 1. 研究開始当初の背景

これまでほとんど手が付けられていなかった本申請の元になった戦争柄着物に関する研究を開始したのは2000年である。その後、10年間ほどに渡り、戦争柄着物の諸相を探ってきたが、専門的な研究はほとんどなく、染織の専門家である藤井健三氏による言及があるだけだった。一方でこれに関して「Wearing Propaganda」という展覧会がUSAで開かれ、また筆者の監修と資料提供によるNHKの番組「戦争を着た時代」が制作されるなど、この種の着物の存在が多少は知られるようになり、また一般の関心も少しずつ得られるようになっていた。

## 2. 研究の目的

本課題においては中でも特に同時代のメディアとの関連について考察する。日清戦争期においては錦絵、雑誌挿絵、幻灯、演劇(歌舞伎、新劇)、日露戦争期においては絵はがき、書簡箋、雑誌挿絵、昭和期においては、新聞記事、ニュース映画などとの相互的な影響関係を探り、戦争柄着物が具体的にどのような意匠で描かれ、それが世の中にどのように需要されたのかを明らかにしたい。

## 3. 研究の方法

錦絵、絵はがき、雑誌挿絵などの実際の画面と戦争柄着物の図柄との中で類似しているものを一対一対応で検討し、その影響関係などを考える。

また同じテーマで複数の意匠を持つ場合について、それぞれの意匠化に際して、どのような要素を取り上げたか、どのような手法で染織されたのかを分析し、単なる絵画ではなく着物柄であるということが出来上がった図柄においてどのように作用したのかを考察する。

これらを積極的に流行させた百貨店広報誌や新聞に掲載された図柄については、実際に残る作例との異同を比較検証する。

更に、当時の新聞、雑誌などの論説に見られる戦争の捉え方、一般の人々の解釈などがどのように着物の図柄に表現されているのかを考察する。特に昭和期の着物の図柄は非常に量も増え、多様になる。明治期の戦争柄の多くが男性の襦袢と羽裏であったのに対して、この時期になると女性の着物、帯、子供の着物などに戦争柄が進出し、その結果として女性向けや子供向けの意匠化が行われるようになる。そのような時代的な差異についても分析する。

## 4. 研究成果

日清戦争の時期にはまだ戦場で写真を撮影することが困難であった。重く嵩張る機器

を運搬して撮影したごく一部の記録(亀井伯爵によるものなど)はあるが、戦中に速報性を求められる報道に使用することはできなかった。また写真から雑誌等への印刷コストも非常に高く、多数を販売することを目的とする新聞や雑誌による報道には適さなかった。しかし文字報道のみでは限界があるために、戦場からの情報に基づいて絵師が想像して描いた錦絵による報道に人気集中した。戦争画報なども多数出版されたが、それらの図版も絵画によるものであり、想像の産物である。

錦絵にしても雑誌挿絵にしても、江戸期に確立した武者絵の様式を踏襲して、戦闘場面を作り上げている。研究対象の具体例は小西四郎氏の収集した錦絵に多くをよったが、ある特定の錦絵や挿絵と襦袢や羽織の図柄とが完全に一致する例を見つけることはできなかった。これはおそらく着物の下絵を描いた職人たちも錦絵的な手法を完全に自家薬籠中のものとしており、コピーではなく自分の作品として類似した場面を描くことができたからであろうと結論した。

また錦絵においては近代歌舞伎に取り上げられた日清戦争を役者名とともに描いた作例が数多くあるが、着物の戦争柄にはそのようなものは見られない。

日露期の絵はがきについては、そのままコピーして着物柄とした例を複数見つけることができた。それは逓信省が発行した絵はがきであり、発売とほぼ同時に売り切れ、これを求める人波の混雑で死者が出たといわれるほど人気のあったはがきである。これに関しては本年夏に執筆する予定の論文に詳述するが、襦袢にも羽裏にも染められ、はがきのみならず着物柄としても人気があったのであろう。

この絵はがきや後述する新聞紙面などを写して図柄とすることは、元来着物柄には色紙や短冊などを用いて意匠化する手法があることから取り込みやすかったのであろうと考えられる。

またこれらの絵はがきを使用する場合に、縁取りとして曲線や簡単な花模様を用いることが多いのは、当時流行したアールヌーボーの影響である。戦争柄以外にも絵はがきを用いた着物の図柄は存在し、それらにもこのような縁取りがなされることがある。着物柄へのアールヌーボーの影響は昭和期に至っても続き、通常の絵画状況における明治のヌーボー、大正・昭和のアールデコというような区別は存在しない。曲線的なヌーボー調はおそらく着物柄には非常に相性の良い意匠であり、時代的な問題を超越して好まれたと考えられる。

百貨店広報誌については、早稲田大学、札幌大学などの図書館で入手した資料のほかにもまだ未見の号があり、三越の資料室と交渉中であるが、未だ全体像が把握できない状況である。筆者以外の研究者の中には比較的容

易に資料を入手している方もおられるが、戦争柄に関する調査という様々な機関から拒絶される傾向があり、現時点で所持する資料だけで論文をまとめるべきかとも思案している。

大正期には雑誌「赤い鳥」などが発行され、子供文化が多様に花開いたことが知られる。明治期からすでにあったのとは傾向を異にする、大正デモクラシー的な児童誌が台頭した。それはちょうど都会の大量消費の時代の始まりでもあり、男児向けの新しい着物柄が生産されるようになった。そのほとんどはつまり吉祥柄であり、男児の健康、長命、出世などを願うものであり、具体的に用いられるのは、伝統的な玩具、昔話の主人公、西洋的なスポーツなどを意匠化したモチーフであった。

その一部に第一次世界大戦で実戦に登場した飛行機、戦車なども描かれるようになったが、その場合、それらは玩具として意匠化されることが多く、実際にそのような玩具も存在したことであろう。戦車や飛行機などの玩具は昭和 20 年代になってもまだ高価であったから、大正期には特権的な贅沢であったことは間違いない。そもそも染めた模様をついた着物自体がこの時代には贅沢品であったことも否めない。

やがて、昭和期に入って模様のついた着物がやや大衆化し、種類を増やす。男児の着物の模様として昔話、スポーツなどの図柄と混淆して戦争柄もごく普通に用いられたのである。

またこの時代になると女性の着物類にも戦争柄が進出する。そもそも明治期の襦袢に描かれた戦争柄の場合、それを着用したのは裕福な男性と花柳界の女性たちであった。また明治の百貨店広報誌や新聞などに掲載された戦争柄の華やかな着物にモデルとして登場するのも花柳界の女性である。しかし昭和になると、その使用者は花柳界に限ることはなくなり、素人の女性向けのシンプルな白い襦袢（これを所持していた婦人の母親は中流家庭の娘、妻であり、この襦袢も通常の礼装用襦袢である）にも織柄として銃や戦車が透かし見えたり、銘仙にも飛行機、戦車、軍帽などが配される。

銘仙は基本的に日常着であり、戦争柄の購買層がより拡大したことを示している。現存する銘仙の戦争柄は一つ一つのモチーフが非常に単純で大きく、大正末から昭和初期にかけての雰囲気作例である。この頃は柄の直径が 10~20 センチの大柄なものが好まれた。また銘仙にはマルホフ式なども称されることのある大胆な意匠も多く、染め物の戦争柄とは明らかに印象の異なる作例が多い。なお布団用かと思われる銘仙にも戦争柄があり、八王子などの銘仙の産地でも戦争柄が制作されたのではないかと推測されるが確証はない。同時期には銘仙の産地である北関東の染織業界の新聞にもこの種の意匠が紹

介される。ただし、現在の桐生、足利、秩父、伊勢崎等の産地を訪問したが、上記の新聞記事以外には当時の資料は発見できなかった。その理由としては戦争時の空襲の故もあると言うが、基本的には戦後、着物が日常着ではなくなって礼装化したために銘仙はほとんど絶滅しかけた時期があり、資料を残す余裕も価値もなかったことが理由として挙げられる。現時点で残るわずかばかりの資料の保存を強く望む所以である。

この時期には女性の帯の中にも新聞記事をそのまま写したものがあつた。元来、帯という素材は着物以上に大胆な意匠を許容する性質があるためか、着物以上に直截な戦争柄が多いのも特徴の一つである。女性向けの戦争柄における大胆さを言えば、着物、襦袢、羽裏等を大きく凌ぐのが帯である。

当時の新聞記事をそのまま写した図柄は意外に多く、それらについては新聞社の協力もあり、比較的順調に元の記事を見つけることができた。生地の種類としては、羽裏、襦袢地、帯、着物等多様である。当時もたくさんの新聞社があり、それぞれにかなりの発行部数を誇っているのであるが、戦争柄となると使用される紙面は朝日新聞（東京と大阪）と毎日新聞に限られる。これは、明治期からの伝統で軟派な記事を掲載して婦女子も読んだといわれる小新聞ではなく、政論を戦わせることで世論をリードしたとされる大新聞との対比があり、着物柄と言えども、戦争という政治的な大説を伝えるに信憑性が感じられることになる大新聞の雄である二紙のイメージを選んだのであろう。

この記事の引用については、既述のように着物柄には色紙や短冊を用いることがあつたという伝統の故であつたと考えられ、その色紙などには文字が書かれていることも無関係ではない。寛文小袖等においても「蘆手模様」と名付けられた文字文様の伝統があり、それは識字階級の裕福さを謂う意味もある。戦争柄の時代には義務教育制度が普及したとは言え、まだまだ非識字者の割合は現在とは比べ物にならない時代である。戦争柄を受容した階層を考えれば、やはり新聞柄を身にまとうことの意味は単純ではなからう。

また新聞記事を写した場合でも、それとは無関係な場合でも、同じ一つのテーマの戦争柄が複数存在することがある。最も多いのが爆弾三勇士（肉弾三勇士）柄である。三人の兵士がきりりとハンサムな大人であつたり、子供の姿であつたり、三人がそれぞれ一つずつの爆弾を抱えて走つたり、一つの長い爆弾を三人で抱えたり（こちらの方が史実である）、三勇士の歌の楽譜が添えられたり、歌詞（2種類ある）が書かれたり、久留米駅頭の出征時のエピソードであつたり、三人の姿はなく鉄帽で暗示されたり、彼らが破壊した鉄条網を示したり、爆死を告げる新聞記事であつたり、実に様々な作例を見ることが出来る。それらの作例にはその元になった多様な

エピソードが人口に膾炙したという背景があり、昭和7年の上海事変が非常な大きさで報道され、またそれに人々が熱狂したことが伺われる。その熱狂のさまをこれらの作例の多さによって伺い知ることは、報道というものの力を改めて確認することでもある。

なお、兵士を子供の姿で表現するのは着物柄にしばしば見られる「見立て」の手法であり、兵隊ごっこをして遊ぶ子供の図柄とは異なる。また、人の姿を表さずに三つの鉄帽や戦場を示すアイテムで暗示するのは「留守模様」という意匠化の手法である。このように着物柄であるから用いる約束事もあり、あくまでも着物柄の文法の中でのデザインであることを忘れてはならない。

また満州事変の際に、錦州で多勢に負勢で戦い戦死した古賀中佐を描いた着物も三例ある。これなどは現代ではほとんど知られることがない作戦の失敗事例であるが、当時は悲劇の英雄として楠木正成に例えられ、正成の紋などを配した図柄すら存在する。正成は何よりも天皇に忠実な臣下であり、果敢に負け戦に挑んだという点をなぞらえたのである。ここに、当時の為政者による、天皇崇拝と戦死をも厭わないという心性とを結びつけようとする意図が、素直に民衆に受容されたことが理解される。

更に、神功皇后や神武天皇を意匠化した事例も多く、これらの天皇につながるイメージは戦争を美化し、正当化するために動員されたものであろう。それらの意匠も当時の雑誌挿絵などに類似した例が見られ、この場合はジャンルを問わずに一種の定型化が起っていたと考えられる。着物には制作の年季がなく断言はできないが、神武天皇柄が多いことには皇紀二千六百年の記念行事の影響があるのではないだろうか。この時期には大量の二千六百年特集が生まれ、その挿絵には当然、初代天皇である神武が描かれた。もちろん皇祖である天照大御神を描いても良いのであるが、女神である故かこれの着物柄は見当たらない。女神でありながら着物柄によく見られる神功皇后は朝鮮征伐の英雄であることが評価されてのことであろう。

筆者が探した限りでは、軍部や政府の高官などが着物柄に言及した証拠は一切発見できなかった。絵画、彫刻、文学、演劇などが戦時体制への協力を求められた証拠が山積するのに対して、着物については資源を節約せよ、華美を避けよ、の2点のみである。

それにも関わらず、このように体制を素直になぞる図柄が制作され、購買されるということは、いかに当時の民衆がこのような図柄を自ら求めていたかの証左である。

また、明治34年に結成された愛国婦人会は上流階級の婦人を動員して、寄付金を募り、それを傷病兵やその遺家族に分配することを目的としていた。よって会の結束を高めるために用いられたのは、高級指向が明らかである徽章、帯留め、会の徽章柄などが入った

杯等であった。一方で昭和7年に結成された大日本国防婦人会は大衆的な組織であることを標榜したために急速に会員数を増加させることに成功した。しかし実際には両方に重ねて登録する場合も多く、両組織が似た戦略を以って会員を勧誘したために類似した帯などを頒布して、会合時に締めることが行われた。その帯の模様を写真報道する新聞記事などもあり、戦争柄を身につけることの意味は現代の感覚とは全く異なっていたことが分かる。つまり、現代の婦人雑誌が掲載する高価なブランドものへの嗜好と大差ない形でこの種のものを着用したのではないだろうか。

更に言えば、家庭婦人においては赤のような派手な色を忌避する当時の旧習の中で、旭日旗を表現する赤は正々堂々と身につけることができ嬉しかったという証言もあり（秋田県出身で、居住していた町では男児の戦争柄着物も、婦人の戦争柄帯もごく普通に着用されていたという方の証言）、現代の感覚からプロパガンダ的な意図を類推し、即断することの危うさがここにも感じられる。政治的な意図とは全く別に、単なるおしゃれであり、流行にすぎない色やデザインとして愛好したとさえ言えるのである。

昭和期の戦争柄には、明治期以降のさまざまな戦争を取り込んで懐古するような図柄があることも特徴の一つである。中でも好まれたのは日露戦争の英雄である東郷平八郎に関するものであり、この戦争が日本にとっては最大の栄光であったと考えられていると推測される。清王朝に勝った日清戦争以上に、西洋文明の一角を占めるロシアへの勝利こそ大日本帝国の面目を最も輝かしめたものだからである。東郷柄とでも称すべき様々な彼にちなむ図柄が日露戦争当時から制作されたことは百貨店広報誌にも詳しい。

日露戦争を描いた絵画（鹿子木孟郎作「奉天入城」）にそっくりそのままの羽裏なども存在するが、それは昭和期の作品である。日本による台湾の植民地化を記念する石川寅治作「台湾鎮定」を写した着物もあり、この2例は油彩画を図柄として用いたものであるが、この種の絵画は当時、様々な雑誌に再々掲載されていた。よって意匠を担当した職人たちは雑誌などの図版からこの絵画を借用したのではないだろうか。もちろん展示された絵画を直接見たことを完全に否定することはできない。しかしその場合でも、これを図柄として製造販売する背景には、これらの絵画が雑誌などによりかなりの人の目に触れており、有名な絵画であるからこそ、着物としても売れるという計算が働いていることは間違いないだろう。つまり、メディアによる周知があったからこそその意匠化である。ファッションというものは他からの差別化と平準化のせめぎあう処にその存在価値を見いだす。皆と全く同じではつまらないが、あまりにもかけ離れていても評価されな

い。とりあえずありふれてはいない新規さと、しかし共通の知識や感性の範囲内にある差異が好ましいのである。

既存の絵画をコピーしたようなことは中国戦線の兵士や地元民を描いた羽裏などにも言えそうである。これらの図柄にはおそらく元になった絵画なり写真なりが存在し、それを援用しての意匠であった可能性を指摘できる。ただし、それを証明するためにはその元図を示すことが不可欠であることは言うまでもない。

絵画や写真を印刷するコストが高かった明治期よりも、印刷物が豊かになった昭和期であるからこそ、明治の絵画も改めて着物柄になることができたとも言える。

戦争が激化し、大政翼賛、一億一心、総力戦などのスローガンが掲げられるようになるとそれを表す着物柄も登場する。銃後の臣民としてのあるべき日常の姿などを表す図柄には、早寝早起きをして、畑を耕し、慰問袋を作り、先祖を礼拝する生活が描かれ、「枕を高くして寝られるのは誰のおかげか」という台詞と戦地を夢に見る寝姿までもが描かれる。この図柄に描かれる一つ一つの場面とそっくり同じものは見られなかったが、よく似た場面は様々な雑誌挿絵等に散見する。つまり当時としてはありふれた表現であり、染色下絵職人の創意工夫はあまり必要としなかっただろう。このような事例において創意工夫が求められるのは図柄自体よりもむしろ色数を押さえて、しかし豊かに色を使っているように見せる配色の問題ではないだろうか。

戦争柄の中にスローガンが登場することは昭和期にはすでに珍しいことではなくなっており、出征列車の見送り、神社への参拝などの場面にもさまざまな言葉が添えられている。このような標語が入る意匠にはデザインとして興を誘うようなものがあまりないのは当然でもあろう。昭和17年頃には、戦争柄として確認できるものは終盤を迎えたと考えられる。それは単に資源の枯渇によって衣料への民需に対応できなくなった時代状況によるのであるが、それはまた意匠としての戦争柄が末期的な様相を示した時でもあった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

乾淑子、吉祥としての戦争柄と有閑階級、いずみ、査読無、44号、2013、p3

乾淑子、一八五一年の万博、あかいはな、査読無、16号、2013、p172-177

乾淑子、山本作兵衛コレクション展、民

族芸術、査読無、28号、2012、p218-219

乾淑子、パッチワーク考、民俗と風俗、査読無、23号、2012、p219-230

乾淑子、戦争と芸術1 戦争柄と着物、保団連通信、査読無、8月号、2011、p55-58

乾淑子、戦争と芸術2 絵本や紙芝居で兵士育成、保団連通信、査読無、9月号、2011、p61-64

乾淑子、戦争と芸術3 戦争画、保団連通信、査読無、10月号、2011、p57-60

乾淑子、戦争柄とメディア 1~6 (1江戸由来の報道錦絵を拝借、2芸者の競い合いと商魂、3絵はがきや書簡箋を使う、4昭和期にも日露もの、5古賀中佐と楠木正成、6イメージ駆使した総力戦)、新聞赤旗、査読無、2011、8月24日、31日、9月7日、14日、21日、28日刊、

〔学会発表〕(計4件)

乾淑子、近代着物と大日本帝国、Technologies of Gender - Shaping Women's Bodies through Kimono and Costumes in Post-Meiji Japan、2014/2/14、Tasmania University

乾淑子、文様から見た時代と文化—軍事主義の時代、家政学会、2013/5/18、昭和女子大学

乾淑子、近代着物における素人と玄人、2013/2/2、十勝家庭科研究者連盟

乾淑子、戦争柄着物の中にあるメディア ---- 絵はがき、錦絵、ニュース映画など、2011/12/10、ジェンダー史学会

〔図書〕(計 件) ありません。

〔産業財産権〕 ありません。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

乾淑子 (INUI Yoshiko)  
東海大学・国際文化学部・教授  
研究者番号：40183008

(2) 研究分担者 ありません。

(3) 連携研究者 ありません。